



自愛心との関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴

佐藤, 有耕

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 6(1):37-49

(Issue Date)

1998-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000318>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000318>



自愛心との関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴

佐藤 有 耕*

The relationship between self-disgust and self-love among undergraduates

Yuhkoh SATOH

問題

青年期には、程度の差はあってもほとんどの青年が自己嫌悪感をもっている(詫摩, 1978)。なぜ、青年期に自己嫌悪感が強く現われるのかについての詫摩の説明は、以下のようである。①青年がこのようにありたいと望んでいる水準が高い、②自分自身に期待するところが大きく他との比較に敏感である、③青年は自分のことを気にするわりには自分の客観的な姿を把握していない、以上3点が理由として考えられている。自己嫌悪感是自己を見つめることによって現われる感情とされるが、青年期はもっとも深い関心を自己に向ける時期である(福島, 1971)。福島は、自己嫌悪感と自己愛的傾向の関連について、「青年期は自己愛的時代であるが、自己愛的であるがゆえに、自己嫌悪感もまた強い」と指摘する。堤(1982)も、青年期の一見矛盾する二極の間を揺れ動く自己について、「ナルシス的な自己愛と自己嫌悪」の関連を言及している。また、西平(1973)も、「ナルチシズムは、“自己愛”でさえなく、多くは自己嫌悪に根ざすものである。彼(彼女)が愛しているのは、空想された自己、賞賛を受ける自己であって、現実に自我同一性として実感を持つ“この私”ではない」ことを述べている。

このように、少なくとも青年期においては、自己嫌悪感と自己愛の関連が従来から指摘されて来ている。しかし、自己嫌悪感との関連を検討するために必要な、青年期の自己愛についての研究はそれほど進んでいないようである。従来の自己愛の研究のレビューを見ても(上地・宮下, 1992)、結果的には、自己愛人格障害とのかかわりを踏襲した研究が多くなされてきていると思われる。しかし、西平(1981)が言うように、ナルチシズムというフロイトが広めたこのことばの意味は、「うぬぼれ、自己陶醉、自己愛、自己賛美から、利己主義、虚栄心の強さ、わがまま」という広い意味で、さらには「どぎつい化粧をすること」までも意味するという。そのほかにも、まわりの注目を集め、賞賛されていないと気がすまない人の自己膨張についてもこれに含めて言及している。また、「ご自愛下さい」という手紙の決まり文句を例にあげて藤澤(1995)は、「自分の身体を大切にすること」も自己愛の一種であると考え。そして、「自分自身に対する愛はその現われ方に応じて種々に形容される」として、自己中心主義、我執も自己愛の一種とみなしている。

そこで、今回自己嫌悪感と自己愛との関連を検討するにあたっては、自己愛という用語を使うと、フロイトの概念という印象が強くなるので、自愛心self-loveというもっとニュートラルなことばを使

*神戸大学発達科学部(発達基礎論講座)

(1998年4月30日 受付)
(1998年6月3日 受理)

用する。自愛心ということばは、自尊心との対比で用いられたり(作田, 1988)、利他心との対比で用いられたりするが(津波古, 1995)、narcissismを自己愛と訳することが多いので、それと区別するためには、自愛心ということばを用いるのは適切なことと考えられる。そして、青年期における自分を愛する心情について資料を収集して内容を整理し、その上で自己嫌悪感との関連を分析することで、自愛心との関連から大学生の自己嫌悪感の特徴を検討することを本研究の目的とする。

方法

本研究では、まず大学生に対して面接を行い、自愛心について回答を求めた。さらにそれと同時進行で、自愛心として表すことができることばの意味についての記述を国語辞典、漢和辞典などのことばの辞典から収集した。そしてこれら2つの手続きで得られた資料を別個に整理し、その後別々に整理された2つの結果をつき合わせて、自愛心の内容をいくつかのグループにまとめた。次に、まとめられた自愛心の内容ごとに質問項目を作成・選定した。続いて、ここで選定された自愛心項目を含む質問紙調査を行い、得られたデータを分析した。以下、この手続きを順に述べる。

面接による自愛心に関する資料収集 次の教示の後に4つの質問を行い、自愛心に関する資料を収集した。「人を愛する、自然を愛するなどのほかに、自分を愛するという感情があります。一般的には自己愛、自愛などの言葉で表現されている、この『自分を愛する心』について、あなたの思うことを自由にお答え下さい。もし、『自分を愛する心』という言い方ではピンとこない場合には、『自己愛』や『自愛』という言葉に置き換えてお答え下さい。」4つの質問は、①『自分を愛する心』ということから連想することが、②『自分を愛する心』が強い人とはどのような人だと思うか、③自分の中に『自分を愛する心』を感じるのはどんなときか、④自分には『自分を愛する心』が足りないと感じるのはどんなときか、であった。回答された内容は面接者によって記録され、面接後に①～④の回答は内容を1件ずつ分けて整理した後で、すべてを込みにして資料として使用した。ただし、面接場面において、話すよりも書く方が回答しやすいと面接者が判断した場合には、面接票を質問紙のように扱い、面接対象者が直接記述して回答した場合もあった。面接者は大学3年生4名(男子1名、女子3名)で、面接対象者は23才の社会人女性が1名含まれていた以外は、大学生及び大学院生の男子28名女子28名、計56名であった。面接時期は1997年11月～12月。

自愛心に関する辞書からの資料の収集 「ナルシズム(ナルシスト等を含む)」、「自愛」、「自己愛」、「うぬぼれ(る)」ということばについて、27冊のことばの辞典(国語辞典、漢字辞典等)から225件の記述を収集し、これを整理した。

質問紙調査の実施と分析 質問紙は本研究で作成・選定された自愛心56項目、佐藤(1994)の文末表現を「～自分をいやだと感じる」から「～自分がいやだと感じている」に改めた自己嫌悪感49項目であった。49項目は7つの下位項目群に分かれており、以下の通りであった。項目記号JA：自分に対する厳しさの欠如を意識するときの自己嫌悪感；項目記号JB：自分の気持ちを素直に表現できないことを意識するときの自己嫌悪感；項目記号JC：人間関係がうまくできない自分を意識するときの自己嫌悪感；項目記号JD：他者への過剰意識を意識するときの自己嫌悪感；項目記号JE：自分の計画を遂行できない自分を意識するときの自己嫌悪感；項目記号JF：他人を傷つける対人的未熟さを意識するときの自己嫌悪感；項目記号JG：自分自身に対する不満を意識するときの自己嫌悪感。なお、このほかに佐藤(1996)を修正した自尊心48項目が含まれたが、今回の研究では処理に含めなかった。

回答は、すべての項目で「たいていそうである／ときどきそうである／たまにはそうである／あまりそうではない／ほとんどそうではない」を選択肢の表現とする5件法で求めた。質問紙調査の対象者は、大学生男子271名、大学生女子237名、看護専門学校生女子27名の計535名となり、これらの学生はすべて年齢24歳以下、平均年齢(SD)は20.02(1.21)才であった。また、回答が得られた25才～48

自愛心の関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴

才の講義受講者は、社会人入学生が多く少人数ではあるが、青年期以降の経過を知る参考となるため、必要に応じて分析に加えた場合もあった。これらの者を本研究の中では社会人系学生と表記するが、男子2名、女子10名の計12名、平均年齢(SD)は32.33(7.34)才であった。調査時期は1998年1月～2月。分析に用いた統計パッケージは、PC-SAS.ver. 6.12であった。

結果と考察

1. 自愛心についての検討

a. 自愛心に含まれる内容の分類 辞書から収集された資料を整理した結果、自愛心に含まれる内容として収集された記述は24分類された(たとえば、自分の身を大切にすること、利己・自分の利益を重んじること、実際以上にすぐれていると思うこと、など)。そして、面接から収集された資料は、似たような内容をまとめていった結果、25分類された(たとえば、自分をより向上させようとする事、自分の外見を美しくしておきたいこと、自分の世界に入って浸っていること、など)。それぞれに分類された内容を合わせて、さらにまとめていった結果、最終的に自愛心に含まれる内容は以下の8分類にまとめることができた。分類A：自分を肯定し、受け入れていること／分類B：自分に対する興味関心が高く、自分を見るのが好きであること／分類C：自分を傷つけないように防衛し、かばい、守ろうとすること／分類D：自分のことがわかっていて、今の自分を大切にしようとしていること／分類E：自己を中心に、自分を最優先に考えて行動しようとしていること／分類F：自分に対する要求水準が高く、理想に自分を近づけようとしていること／分類G：自分が人に注目され、人から賞賛の目を向けられるのが好きであること／分類H：自分自身を(過大に)高く評価し、自分の能力や可能性を信じていること。これら8分類ごとに7項目ずつを作成・選定し自愛心に関する56項目を構成した。

b. 自愛心項目得点からみた特徴 自愛心56項目において、各項目の得点範囲は1点～5点であったが、今回の結果では全般的に得点が高く、以下の通りであった。平均得点が2.0未満の項目は見られず、2.5未満の項目もわずかに4項目であり、2.5以上3.0未満が16項目であった。半分以上の残り36項目は3.0以上であり、3.0以上3.5未満のものが21項目、3.5以上4.0未満が10項目、4.0以上が5項目あった。そのため標準偏差も、1.0未満のものが12項目あり、全体56項目では0.83～1.22の範囲であった。大学生535名の平均得点の上位5項目は次の通りで、平均得点は以下のカッコ内に示した。「LF2自分をさらに高めてやりたいと考えている[4.41]」、「LF1現状維持のままでは終わりたいと思っている[4.40]」、「LD1私らしさは捨てたくないと思っている[4.30]」、「LD2人とは違う自分らしさを大切にしようと思っている[4.04]」、「LD3自分の意志や思いを大切にしている[4.00]」。また、下位5項目は次の通りであった。「LB7自分がかわいくて抱きしめたくなる[2.11]」、「LA4私は今の自分で十分だと思っている[2.30]」、「LE6他人の意向を犠牲にしても自分の考えを押し通す[2.38]」、「LH6私は実力の割には評価されていない気がする[2.48]」、「LG6人からの注目や視線を浴びているつもりで行動している[2.50]」。

項目群の8分類ごとに見ると、各7項目の平均得点は以下のカッコ内に示した範囲であった。「分類A：自分を肯定し、受け入れていること[2.30～3.55]」、「分類B：自分に対する興味関心が高く、自分を見るのが好きであること[2.11～3.92]」、「分類C：自分を傷つけないように防衛し、かばい、守ろうとすること[2.76～3.77]」、「分類D：自分のことがわかっていて、今の自分を大切にしようとしていること[3.15～4.30]」、「分類E：自己を中心に、自分を最優先に考えて行動しようとしていること[2.38～3.57]」、「分類F：自分に対する要求水準が高く、理想に自分を近づけようとしていること[2.63～4.41]」、「分類G：自分が人に注目され、人から賞賛の目を向けられるのが好きであるこ

と[2.50~3.72]」、「分類H：自分自身を(過大に)高く評価し、自分の能力や可能性を信じていること[2.48~3.44]」。このうち、「分類D：自分のことがわかっていて、今の自分を大切にしようとしていること」では7項目中6項目が平均得点で3.50以上を示していた。大学生においては、自分らしさに対するこだわりの気持ち、自分の意志や思いを大切にしようとする気持ちが強いということができよう。

また、これら535名の大学生の平均得点と、社会人系学生12名の平均得点を数値上で比較してみると、次のようであった。分類A~Hの項目群別に見ると、各7項目中において5項目以上で大学生の平均得点の方が社会人系学生よりも低かったのは、分類Aと分類Dだけであった。それ以外では、7項目中5項目以上で大学生の平均得点の方が高い項目群ばかりであった。すなわち、年齢が上になると得点が高くなると思われるのは、「分類A：自分を肯定し、受け入れていること」と「分類D：自分のことがわかっていて、今の自分を大切にしようとしていること」の2つの項目群の項目であった。さらに項目単位で見ると、社会人系学生の方が平均得点が高いものは19項目あり、0.5点以上の差があった項目は以下の2項目であった。差の大きさはカッコ内に絶対値で示した。「LA3今の自分の生活に納得している[0.66]」、「LD4建て前ではなく自分の本音に忠実に生きようと思う[0.58]」。社会人系学生の方が平均得点が低いもので差が0.5以上の項目は11項目あったので、差の大きい5項目だけを示す。

「LC7自分の心を守るために自分の世界に閉じこもってしまう[0.84]」、「LF6私は自分に対してかなり高い水準を求めている[0.82]」、「LG1人前では見栄を張って自分を大きく見せようとしてしまう[0.79]」、「LG5人から賞賛されるような自分でありたいと願っている[0.72]」、「LB5何度でも鏡をのぞいて自分の顔を見たくなる[0.64]」。これらの結果を見ると、自分の現状に満足し現状を肯定する気持ち、自分の本音や自分の意志を尊重する気持ちは、年齢が上がると高まるようであった。逆に、自分を守ろうとする気持ち、人から注目されたいという気持ち、自己に対して理想主義的に高水準の期待や願望を寄せる気持ちなどは年齢が上がると低まるようであった。つまり、年齢が上がることで自己の現状に満足し肯定する気持ちが現れ、そのように自己の価値を認められることもあって、まわりの目を意識する気持ちよりも自分のやり方でいこうとする気持ちが強くなるのであろう。そして、傷つきやすい自分を守ろうとする気持ち、他者に対して注目されることで自分を価値づけようとする気持ち、現実の自己でなくイメージの中の理想的な自己に対する期待やこだわりの気持ちなどは少なくなっていくということであろう。ここでの結果は単純で大まかなデータの検討から得られたものではあるが、考察された内容は伊藤(1997)が理想像と自己像から見た発達的特徴として指摘する、青年期以降においては現実自己像が次第に理想像へ接近していくという発達的变化に重なるところがあると思われる。

c. 自愛心56項目の因子分析 すでに自愛心項目について、個々の項目単位で平均得点を用いた検討を行った。続いてここでは、これら56項目全体を因子分析し、自愛心の内容について分析してみる。535名の回答をデータ行列として、重みづけをしない最小自乗法により因子パターンの初期解を求め、固有値の推移を見て因子数10から順次因子数を減らし、Promax解を求めた。単純構造に近く、解釈が可能な最大の因子解を採用しようとして、7因子解を最適解とした。このとき、7個の共通因子で説明可能な分散の総和の割合は41.40%であった。得られた因子パターンはTABLE1に示した。因子の解釈に用いる項目は、.40以上の負荷量をもつことを基準とした。各因子は以下のように解釈された。

第1因子に高い負荷量を示した項目は、「分類A：自分を肯定し、受け入れていること」の5項目を中心に6項目あった。「LA2自分の現状に満足している(.89)」、「LA4私は今の自分で十分だと思っている(.86)」が代表的な項目であり、負の負荷量をもつ項目としては、「LF1現状維持のままでは終わりたいと思っていない(-.46)」があった。第1因子は自己の現状を是認し、自己に対して満足している気持ちを表すと解釈され、「SL1自分の現状に対する是認と満足(満足感と略記する、以下同じ)」とした。

自愛心の関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴

TABLE1 自愛心56項目の因子パターン行列(Promax回転後)

項 目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	h ²
LA2自分の現状に満足している	89	-01	-02	-03	06	00	-02	76
LA4私は今の自分で十分だと思っている	86	02	-15	-02	04	08	-04	73
LA3今の自分の生活に納得している	81	04	03	-10	08	-05	02	64
LA1今の自分で満足だと感じる	81	-02	03	08	05	00	-08	69
LA6自分はこれでよいのだと感じる	65	15	12	07	-12	-04	01	55
LF1現状維持のままでは終わりたいと思っていない	-46	14	27	-02	10	-08	10	34
LH4私の秘められた可能性はかなり高いと思っている	-01	85	03	-01	-06	-11	10	64
LH7自分がやればたいはいのことばうまくいくはずだと信じている	08	83	-05	-02	-05	08	-13	68
LH3私が本気を出せば人よりうまくやれると信じている	01	75	-02	01	05	05	-03	63
LH5自分の実力はかなりの高水準にあると思っている	09	75	-11	06	09	01	-06	65
LH2私がその気になってやれば何でもできるはずだと思っている	01	68	11	-10	-05	01	06	45
LH1自分の能力が他の人より劣るはずがないと信じていたい	04	53	-04	-06	21	14	03	48
LA5私は自分のことをけっこういいやつだと思っている	21	37	11	15	-07	-15	08	29
LH6私は実力の割には評価されてない気がする	-18	36	-05	17	05	02	03	27
LD2人とは違う自分らしさを大切にしようと思っている	-01	01	81	10	-10	-09	04	64
LD3自分の意志や思いを大切にしている	08	-10	78	04	-05	13	-11	59
LD5自分の生き方にはこだわっていききたい	-11	-04	74	-02	12	10	-05	62
LD1私らしさは捨てたくないと思っている	-06	00	73	06	-05	-06	-02	50
LD4建て前ではなく自分の本音に忠実に生きようと思う	07	-08	60	-16	15	14	-04	43
LF2自分をさらに高めてやりたいと考えている	-16	11	51	05	20	-18	01	46
LA7限界や欠点も含めて、自分のことを受け入れられる	34	07	39	-03	-09	-05	01	32
LD7自分のためにリラックスできる時間を確保するようにしている	12	11	30	-03	-14	-06	20	15
LG4人から注目されているのを感じていい気持ちになる	-05	-11	16	73	-03	-01	-08	44
LG6人からの注目や視線を浴びているつもりで行動している	03	-03	-12	70	09	00	-12	48
LG3人よりもめだっていないと気がすまない	-06	02	06	67	06	10	-28	49
LG7人に自分の経験を語って聞かせていい気分になる	-03	08	-01	61	-12	-02	01	36
LB5何度でも鏡をのぞいて自分の顔を見たくなくなる	08	-10	-01	44	17	02	07	27
LG2自分の努力や業績は少し色をつけて大げさに吹聴してしまう	-09	11	-05	39	00	07	15	29
LG1人前では見栄を張って自分を大きく見せようとしてしまう	-14	01	-04	37	09	12	17	31
LB7自分がかわいくて抱きしめたくなくなる	15	21	-03	36	03	07	06	37
LB6自分の世界に入ってしまうことがある	15	11	03	31	07	-06	20	28
LB2自分の将来について楽しく空想をめぐらしてみる	19	00	16	21	13	-12	04	18
LF3完璧な自分でありたいと願っている	05	07	-13	-06	65	06	04	42
LB3服装や身だしなみはいつもバッチリ決めた自分でいたい	14	-27	06	10	57	-11	18	29
LF6私は自分に対してかなり高い水準を求めている	-08	28	02	-01	54	-04	-04	54
LF5自分に求める目標や理想はかなり高く設定している	-10	22	12	-05	50	-08	01	47
LF7自分の理想を下げるようなことはできない	-02	07	27	-07	48	10	-08	47
LF4自分は何でもできる人でなければならないと思っている	-01	29	-13	02	48	01	-02	43
LB4ルックスがピシッと決まっていけないと不機嫌になる	11	-16	-06	28	46	07	11	35
LG5人から賞賛されるような自分でありたいと願っている	-03	17	-03	25	35	00	-02	39
LB1性格や運命など、自分についていろいろ知りたい	02	-09	15	04	26	-16	19	13
LE1自分のためには他人の事は二の次にしてしまう	-02	00	01	03	-08	60	10	40
LE6他人の意向を犠牲にしても自分の考えを押し通す	01	02	11	01	05	59	-18	37
LE2他人のことよりは自分のことを優先して考える	02	-01	-01	05	-08	59	17	44
LE5心のどこかで自分さえよければいいと思っている	-11	-01	-10	18	-10	55	16	47
LE7人のために何かするよりは自分のための努力をしたい	-03	04	-05	00	03	48	04	27
LE4自分勝手と言われても自分を活かす生き方をする	07	10	37	-09	02	47	-07	43
LE3私の損になるようなことはしたくない	15	-06	-03	-10	11	37	25	25
LC3自分を傷つけるような現実からは目をそむける	02	00	-07	-12	08	04	63	37
LC4自分が不利なときにはその場から逃げようとする	-13	-01	-06	-01	-07	13	56	40
LC5自分にに対する批判には耳をふさぎたくなる	-01	01	-06	00	05	02	49	26
LC6自分を傷つけるものから自分を守ろうとする	-06	-03	15	-12	10	23	44	31
LC7自分の心を守るために自分の世界に閉じこもってしまう	-13	08	-09	00	09	01	41	23
LD6自分の体を大切にしたいようにしている	17	-10	13	-01	11	-05	24	10
LC1つつい自分のことを正当化しようとする	06	07	10	15	02	10	23	19
LC2自分の都合のよいように物事を解釈する	12	07	20	18	-19	16	20	23
因子間相関								
F1								
F2	13							
F3	15	41						
F4	19	54	14					
F5	-14	58	37	44				
F6	03	35	06	34	28			
F7	-03	02	-05	36	05	33		

(小数点省略)

TABLE2 自愛心の一次因子得点に関する
二次因子パターン行列(Equamax回転後)

	F I	F II	h^2
SL2万能感	.90	.24	.86
SL5完全主義	.70	.25	.56
SL3自己尊重	.53	-.05	.28
SL1満足感	.12	.01	.01
SL7自己擁護	-.16	.80	.66
SL4自己陶醉	.50	.59	.60
SL6自己中心	.26	.56	.38
因子寄与	1.93	1.42	3.34
(%)	27.5	20.3	47.8

(因子負荷量と共通性については小数点省略)

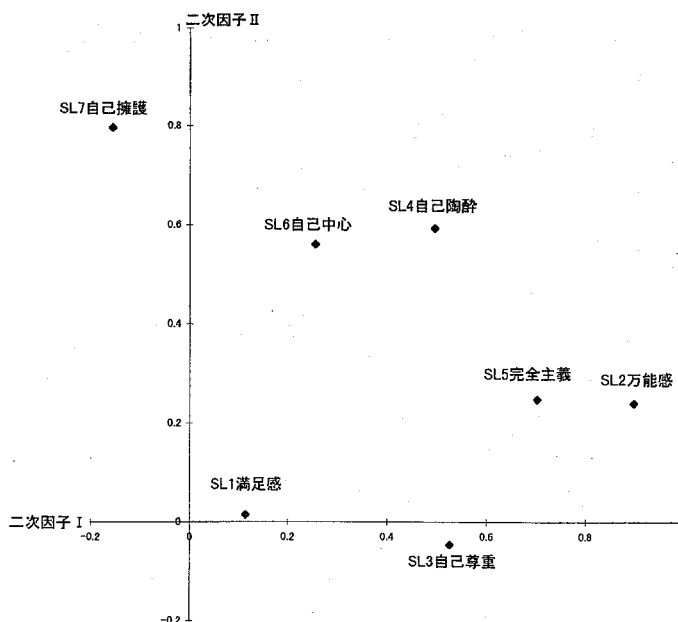


FIGURE1 因子負荷量を用いて表した自愛心7因子の二次因子分析結果のプロット

第2因子に関しては、「分類H：自分自身を(過大に)高く評価し、自分の能力や可能性を信じていること」の7項目すべてが.40以上の負荷量を示した。「LH4私の秘められた可能性はかなり高いと思っている(.85)」、「LH7自分がやればたいいのことはうまくいくはずだと信じている(.83)」などの項目があった。この第2因子は、現実の自己の姿を評価して得られた自信というより、過信とも言えるような自分の能力や実力に対する強い思い込みや思い入れの気持ちであろう。確かに自己への信頼ということでもあるが、イメージの中での万能感や自分に向けられた過度の期待とも読み取れる。そこで、これを『SL2自分の能力への高い期待と万能感(万能感)』とした。

第3因子では、.40以上の負荷量を示したのはすべて「分類D：自分のことがわかっていて、今の自分を大切にしようとしていること」の項目であった。「LD2人とは違う自分らしさを大切にしようと思っている(.81)」、「LD3自分の意志や思いを大切にしている(.78)」など、自分の個性や自分の意志を重んじ、大事にしようとする気持ちを表しているとして解釈される。このことから第3因子は、『SL3自分らしさの尊重(自己尊重)』とした。

第4因子は、「分類G：自分が人に注目され、人から賞賛の目を向けられるのが好きであること」の5項目が.40以上の負荷量を示しており、「LG4人から注目されているのを感じていい気持ちになる(.73)」、「LG6人からの注目や視線を浴びているつもりで行動している(.70)」を代表項目としてあげることができる。この因子は一人よがりや独善的な、いわゆるナルシスティックな傾向を表している。そこで第4因子を、『SL4一人よがりな自己陶醉(自己陶醉)』とした。

第5因子には、「分類F：自分に対する要求水準が高く、理想に自分を近づけようとしていること」から5項目が.40以上の負荷量を示し、「LF3完璧な自分でありたいと願っている(.65)」、「LF6私は自分に対してかなり高い水準を求めている(.54)」などがあつた。これは理想や目標を高く掲げ、そして自分に対して完璧な自分であることを求めるという青年期的な理想主義や完全主義をあらわしている。そこで、この第5因子を『SL5自分に課した高い要求水準と完全主義(完全主義)』とする。

第6因子では、「分類E：自己を中心にして、自分を最優先に考えて行動しようとしていること」に含まれる6項目だけが.40以上の負荷量を示していた。「LE1自分のためには他人の事は二の次にして

しまう(.60)」、「LE6他人の意向を犠牲にしても自分の考えを押し通す(.59)」などであり、自分を中心に考えて行動する自己中心的な傾向を表している。そのため第6因子は、『SL6他者よりも自分を優先する自己中心主義(自己中心)』とした。

最後の第7因子に.40以上の負荷量を示したのは「分類C：自分を傷つけないように防衛し、かばい、守ろうとすること」の5項目だけであった。代表的な項目としては、「LC3自分を傷つけるような現実からは目をそむける(.63)」、「LC4自分が不利なときにはその場から逃げてしまう(.56)」などがあげられる。この因子は、自分を傷つけないために自分をかばい守ろうとする自己擁護的な傾向を表している。この第7因子は、『SL7傷つくことから自分を守ろうとする自己擁護(自己擁護)』とした。

大学生の自愛心の内容は、ここまで解釈したように7つにまとめられたが、解釈された因子の内容からも、因子間相関係数の大きさの散らばりからも、自愛心についてさらなる因子を抽出することが可能であると思われた。そこで7因子について標準因子得点を用いた二次因子分析を行った。抽出された最大の二次因子解は2因子解であり、直交解(Equamax回転)でも斜交解(Promax回転)でも因子パターンにほとんど差は見られなかった。因子分析結果を視覚的に表現する上では直交解の結果の方が利用しやすいため、ここでは直交解の結果を採用した。二次因子パターン行列はTABLE2に示し、これをFIGURE1に図示した。

自愛心の二次因子Ⅰに.40以上の負荷量を示したものは、「SL2万能感(.90)」、「SL5完全主義(.70)」、「SL3自己尊重(.53)」、「SL4自己陶醉(.50)」の4つの一次因子であった。一方、自愛心の二次因子Ⅱに.40以上の負荷量を示したものは「SL7自己擁護(.80)」、「SL4自己陶醉(.59)」、「SL6自己中心(.56)」の3つの一次因子であった。どちらの二次因子にも.40以上の負荷量を示さなかったものが1つあり、「SL1満足感」であった。

二次因子Ⅰには、自分に向けられた熱い思いとも言えるべき情意の高まりが示されている。やればできるはず、本気を出せばやれるはず、秘められた可能性は高いなどの、自己に対する思い入れの気持ちや期待がこめられている。しかし、この気持ちはどちらかというところ、そうであってほしい、いやそうであるはずだという気持ちであり、現実裏打ちされた確信や自信とは思われない。その意味では、自分に対する主観的で多分に期待や願望を込めた見方から生じたものと言えるであろう。これは、現実に触れてしまえば脆く崩れそうな、自己イメージの中だけの万能感に過ぎない可能性が高いのではないだろうか。次には、自分に対して高い理想や目標を課し、完璧な自分でありたいと願う気持ちがある。これはむしろ自己愛願望とも呼ぶのがふさわしい、完全でバッチリ決めた自分の姿だけを見たい、理想を下げずにがんばっている妥協を許さない自分でありたい、現実の自分の姿や能力はどうであれ、完璧な自分の姿を求め続けたいという、理想主義に彩られた自己への思いを表しているようである。

結局のところ二次因子Ⅰの根底にあるのは、現実がどうであれ客観的な事実がどうであれ、自分の価値を信じるという強い思い込み、すなわちそれでも自分を信じ自分に賭けるという形での自己への愛ではないだろうか。そして、それがあから、なお自分に高い理想を課し、完璧な自分であることを要求する。自分の価値を信じているからこそ、自分らしさに価値を見出すことができ、その自分にこだわっていかうとするのである。

一方、二次因子Ⅱは、自愛心に含まれるうちの、自己愛的世界への引きこもり(ベッテルハイム,1978)、他者の存在や現実の世界とはかけ離れた意識の中での一人よがりな自己陶醉の世界、愛他心とは逆に自分を優先する自分を中心とした世界、そのような中にいることを表していると言えよう。自己と、まわりの他者や現実世界とのかかわり方に適切さを欠く、閉じた自己完結的な世界にいることを表すものと解釈できる。まわりが見えずに自分だけの快さの中にいるかのような、あるいは「世界は二人のために」ならぬ「世界は自分のために」といった形での自己への愛ということになる。

これら2つの二次因子の解釈からは、二次因子Ⅰは自己イメージと自己とのかかわりという点で、

自愛心の対自的側面とすることができる。自分の価値を信じ、高い要求水準を課して理想を下げず、自分にこだわっていく姿勢を表している。そして背後には、自分に失望することを極力回避しようとして、自分の持っている高い自己イメージを守り、維持しようとする傾向があると考えられる。これに対して二次因子Ⅱは、まわりの他者や現実世界とのかかわりという点で、自愛心の対他側面とすることができる。現実から自分を守り、自己陶醉の中で、他者よりも自分を優先して考える姿勢を表している。この背後には、他者や現実とのかかわり方に適切さを欠く自己中心的な傾向があると考えられる。

さて、自愛心の一次因子分析において第1因子として抽出された「SL1満足感」は、どちらの二次因子にも高い負荷量を示すことはなかった。FIGURE1を見ても、二次元の交点付近にあり、どちらの二次因子とも関連が薄いことを示している。この「SL1満足感」という一次因子は、自分に対する高い関心や思い入れという力動的な「愛」という色あいは薄く、7つの一次因子の中では若干ニュアンスが異なるようでもある。むしろ、セルフ・エスティームself-esteemにおけるgood enough(これでよい)の側面(遠藤・井上・蘭, 1992)に近いと考えられる。少なくとも大学生においては、自己の現状に対する肯定感や満足感は、自愛心において重要な位置を占めるものではないということが言えよう。これに対して、どちらの二次因子にも.40以上の負荷量を示したのは「SL4自己陶醉」であった。今回新たに整理された自愛心の内容においても、自愛心の中核概念として存在するのは「SL4自己陶醉」ということであった。

2. 自己嫌悪感49項目の分析

a. 自己嫌悪感項目得点からみた特徴 自己嫌悪感49項目において、各項目の得点範囲は1点～5点であった。全般的に得点は高く、中間の値である3.0に達しない項目はわずかに6項目であった。平均得点が2.5未満の項目は見られず、2.5以上3.0未満はその6項目だけであった。3.0以上3.5未満のものが35項目、3.5以上4.0未満が8項目であった。標準偏差は、全体49項目では1.02～1.38の範囲であった。平均得点3.5以上の8項目のうち7項目までが、先行研究(佐藤, 1994; 佐藤・落合, 1995; 佐藤, 1996)において常に第一因子として高い負荷量を示す項目記号JAとJEの項目であった。上位3項目は次の通りで、平均得点は以下のカッコ内に示した。「JA1生活がだらけている自分がいやだと感じている[3.67]」、「JE2やろうとしていることがなかなか進まない自分がいやだと感じている[3.67]」、「JE5やらなくてはならないとわかっていてもがんばれない自分がいやだと感じている[3.57]」。平均得点の下位3項目は「JC4クラスになじめない自分がいやだと感じている[2.73]」、「JB7無理をしている自分がいやだと感じている[2.83]」、「JF3人の気持ちを考えずに言いすぎてしまう自分がいやだと感じている[2.86]」であった。

また、535名の大学生の平均得点と、社会人系学生12名の平均得点を数値上で比較してみると、大学生の平均得点の方が社会人系学生よりも低かったのは3項目だけであった。差の大きさはカッコ内に絶対値で示したが、ごく小さな差であった。「JF3人の気持ちを考えずに言いすぎてしまう自分がいやだと感じている[0.06]」、「JF1言わなくていいことまで言って人を傷つけてしまう自分がいやだと感じている[0.02]」、「JB7無理をしている自分がいやだと感じている[差は0.00未満]」。何か言い過ぎて人を傷つけることで感じる自己嫌悪感は、自分に自信があり、言おうとすることをきちんとと言えるようになったことが逆に作用するようで、ほかの自己嫌悪感に比べて年齢による減少が現れないようであった。社会人系学生の方が平均得点が低い項目は46項目であり、1.0以上の差があるものが2項目、0.5以上の差があるものもこの他に16項目あった。1.0以上の差があった2項目は、先行研究において常にひとつの因子に高い負荷量をもつ「JG6自分のやりたいことが見つからない自分がいやだと感じている[1.61]」、「JG7自分が本当にしたいことがよくわからない自分がいやだと感じている[1.25]」であった。

自愛心の関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴

TABLE3 自己嫌悪感49項目の因子パターン行列(Promax回転後)

項目の概要(“～がいやだと感じている”の部分を省略)	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h ²
JA6なまけている自分	93	-06	00	-14	11	-02	76
JA5精神がたるんでいる自分	88	-10	01	-15	09	03	66
JE4自分で決めたことをやらずにいる自分	73	-06	-04	18	-03	-02	61
JE6自分で決めたことをやりとげられそうにない自分	72	02	-01	04	-01	05	59
JE7やろうとしていることに全力で向かっていない自分	70	06	-03	05	00	08	64
JA4不規則な生活をしている自分	69	03	-05	-20	-04	00	33
JE5やらなくてはならないとわかっていてもがんばれない自分	69	05	-02	03	08	00	58
JE3やろうと決めたことに対して努力していない自分	68	-01	06	08	-03	-01	55
JE1計画したことを実行できない自分	66	00	03	06	-03	-03	47
JE2やろうとしていることがなかなか進まない自分	63	01	-05	07	04	-01	46
JA1生活がだらけている自分	62	06	-06	-08	-05	06	36
JA3誘惑に負けてしまいがちな自分	53	-13	02	15	11	-01	42
JA7自分に甘く、すぐに妥協してしまう自分	53	-03	10	00	04	12	43
JA2安易な、楽な道を選んでしまう自分	46	-09	08	14	08	09	42
JB4うそをついてしまうときの自分	25	-01	09	10	16	-04	21
JC7まわりの人とうちとけることができない自分	-04	92	-02	-01	-02	03	79
JC1人とうまくつきあえない自分	-05	83	02	-07	08	-02	66
JC2人とのつきあい方がへたな自分	-09	83	02	08	05	-02	77
JC6人と話すことが苦手な自分	-03	79	-08	-05	14	01	67
JC4クラスになじめない自分	01	75	03	-10	00	04	52
JC3まわりの人と自分の間にカベを作ってしまう自分	06	66	03	05	06	-03	60
JC5人といっしょにいればなれなくとも自分	-03	59	03	07	05	01	47
JG5自分でも好きになれるような性格がある自分	21	26	05	22	-03	10	43
JF2人を傷つけるようなことを言ってしまう自分	-13	-08	95	-08	09	05	77
JF1言わなくていいことまで言ってしまう自分	-16	-09	89	05	-06	06	67
JF7相手のことを考えずにきいてしまう自分	02	06	81	02	-01	-04	71
JF3人の気持ちを考えずに言いすぎてしまう自分	-02	08	81	-06	01	02	65
JF5軽はずみなことばで人にいやな思いをさせる自分	03	-03	78	05	-01	-03	64
JF4人に不快な思いをさせしてしまう自分	24	13	63	-03	-02	-08	61
JF6イライラする時に人にあたって迷惑をかけてしまう自分	24	13	28	23	-19	-08	33
JD7人からの評価を意識しすぎる自分	-11	-04	04	90	03	-03	70
JD6周囲の目を気にする自分	-06	05	00	81	09	04	80
JD5人からどう思われているかを気にして行動している自分	-10	03	-01	79	16	-03	72
JD4ついで人と自分を比べてしまう自分	02	-14	-03	78	13	01	62
JD2人の目ばかりを気にしている自分	-12	08	-02	76	12	02	70
JD3人のことが気になってしまう自分	-14	-02	02	74	16	03	63
JD1まわりからの評価を気にして行動している自分	-08	-02	02	71	15	-06	56
JG4自分の理想像と現実の姿との間に落差がある自分	30	26	-10	43	-27	03	42
JB2強がりと言ってしまう自分	-01	-07	19	37	-03	12	23
JB7無理をしている自分	08	11	-02	33	06	05	27
JG3自分の理想の体つきとは違っている自分	15	-01	-05	33	-15	07	13
JG1自分に自信が持てない自分	16	11	00	32	14	01	39
JB3思ったとおりのことを言えない自分	03	08	00	-05	80	-01	69
JB1自分の本当の気持ちを人に伝えられない自分	-06	11	-02	04	67	-05	53
JB5自分の感情をそのまま表現できない自分	08	18	-03	-06	64	-01	57
JB6自分の気持ちに正直になれない自分	07	07	08	12	50	08	56
JG2ものごとをすぐに決められず、迷ってしまう自分	05	-10	-10	32	41	06	39
JG7自分が本当にしたいことがよくわからない自分	02	04	04	00	00	90	88
JG6自分のやりたいことが見つからない自分	-03	-01	-04	-01	-01	88	72
因子間相関	F1						
	F2	46					
	F3	43	43				
	F4	61	65	50			
	F5	45	64	32	69		
	F6	51	33	23	45	37	

(小数点省略)

b. 自己嫌悪感49項目の因子分析 自己嫌悪感の49項目については、すでに6因子解(佐藤, 1994; 佐藤・落合, 1995)あるいは7因子解(佐藤, 1996)が得られたことが報告されている。結果と考察の1.で行った自愛心の因子分析と同様の手続きによって因子数7から順次因子数を減らし、Promax解を求めた。先行研究の結果も参考にして、単純構造に近くて解釈がしやすい因子解を採用しようとして、6因子解を最適解とした。このとき、6個の共通因子で説明可能な分散の総和の割合は55.67%であった。得られた因子パターンはTABLE3に示した。因子の解釈に用いる項目は、.40以上の負荷量をもつことを基準とした。その結果、今回解釈された6因子は、抽出された順番に違いはあるが、先行結果の6因子解と同一の因子が抽出されたと判断された。したがって改めて因子の解釈を行うことはせず、因子名を列記するにとどめた。自己嫌悪感49項目を因子分析して得られた自己嫌悪感の6因子は、第1因子から順に以下の通りであった。『SD1課題遂行停滞』, 『SD2他者との親和不能』, 『SD3他者への配慮欠如』, 『SD4他者への意識過剰』, 『SD5他者への表出不能』, 『SD6目標方向不定』であった。

続いて、これら6因子の標準因子得点を用いて一次因子分析と同様の手続きによる二次因子分析を行った。これは結果と考察の3.で自愛心との関連から自己嫌悪感の特徴を調べるにあたり、自己嫌悪感をさらに上位の少数の因子に集約しておくことを意図したためである。二次因子分析結果は、佐藤(1994)の結果から、2因子解あるいは3因子解、佐藤(1997)の結果からは2因子解が抽出されることが予想された。実際に3因子解まで抽出は可能であったが、自愛心との関連をみるために自己嫌悪感の因子を集約しておくという目的のためには、安定した2因子解の方が適切であると判断し、2因子解を抽出した。このとき、2個の共通因子で説明可能な分散の総和の割合は63.50%であった。TABLE4に示したのが、この2因子解による二次因子パターン行列である。先行研究から予想された通り、二次因子Ⅰとして他者との関係に関連して感じられる自己嫌悪感である『Ⅰ 対他的な自己嫌悪感』が抽出され、自己のあり方に関連して感じられる自己嫌悪感である『Ⅱ 対自的な自己嫌悪感』が二次因子Ⅱとして抽出された。

TABLE4 自己嫌悪感の一次因子得点に関する
二次因子パターン行列(Promax回転後)

	FⅠ	FⅡ	h ²
SD5他者への表出不能	.84	.02	.72
SD2他者との親和不能	.80	.02	.67
SD4他者への意識過剰	.74	.24	.81
SD3他者への配慮欠如	.36	.24	.29
SD1課題遂行停滞	.01	.99	.99
SD6目標方向不定	.22	.42	.33

(因子間相関は.56/表中では小数点省略)

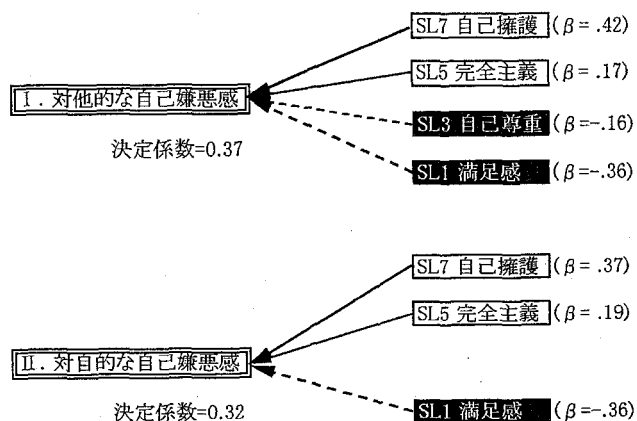


FIGURE2 自己嫌悪感を目的変数とした自愛心との間の重回帰分析結果

3. 自愛心と自己嫌悪感の関連の検討

自愛心との関連から自己嫌悪感の特徴を検討するために、ここでは自己嫌悪感の二次因子を目的変数とし、自愛心の一次因子を説明変数とする重回帰分析を行った。自己嫌悪感の一次因子は、6個あるが、項目はすべて「～自分がいやだと感じている」という表現で同一であり、細かく分けて関連を検討していく必要はないと考えたからである。また、説明変数間に高い相関があることは避けた方がよいので、ここでは自愛心の標準因子得点を、直交解7因子(Equamax回転)により算出した。直交解7因子(Equamax回転)による因子分析結果は、TABLE1に示したPromax回転の結果に比べて、全体に負荷量の値が小さくなる以外には因子の抽出順も含めてほとんど同じ結果になった。TABLE1において、40以上の負荷量を示した項目以外で、直交解で新たに、40以上の負荷量を示す項目はなかった。また、TABLE1において、40以上の負荷量を示した項目が直交解の結果負荷量が小さくなった場合でも、.35以上の負荷量を維持していた。

以上のような変数設定で、2つの自己嫌悪感二次因子得点に対して、ステップワイズ方式の重回帰分析を行った結果を以下に述べる。二次因子Ⅰの対他的な自己嫌悪感を目的変数にした場合では、有意水準5%で、自愛心の4つの因子を選出した。重相関係数は0.61($F(4, 530)=78.90, p<.001$)であり、標準偏回帰係数もすべて有意であった(ステップ順に、SL7自己擁護： $t=12.33$, SL1満足感： $t=-10.32$, SL5完全主義： $t=4.93$, SL3自己尊重： $t=-4.61$, すべて $df=530, p<.001$)。次に、二次因子Ⅱの対自的な自己嫌悪感を目的変数にした場合では、有意水準5%で、自愛心の3つの因子を選出した。重相関係数は0.56($F(3, 531)=82.83, p<.001$)であり、標準偏回帰係数もすべて有意であった(ステップ順に、SL7自己擁護： $t=10.38$, SL1満足感： $t=-10.09$, SL5完全主義： $t=5.32$, すべて $df=531, p<.001$)。これらの結果をそれぞれ上下に並べて一度に2つの結果を図示したものがFIGURE2である。なお、説明変数を斜交解7因子(Promax回転)による標準因子得点を用いて行った場合は、どちらの自己嫌悪感に対しても、「SL6自己中心」が負の標準偏回帰係数をとってさらに選出される以外には大差なかった。

二つの自己嫌悪感の重回帰分析結果に共通していたことは、第一に「SL7自己擁護」、「SL5完全主義」の2つの標準偏回帰係数が正の値になることであった。まず、傷つくことから自己を守ろうとするという意味での自己愛的な気持ちの高さが自己嫌悪感の高さを説明するということである。さらにもうひとつ、自分に高い要求水準を課し、自己に対して理想主義的に完全主義を求めるという意味での自己愛的な気持ちの高さが、自己嫌悪感の高さを説明するということである。すなわち、自分を傷つけないように自己をかばおうとする気持ち、そして自己に対して高い理想を課し、完全であることを求めるとい一般に言われている青年期的な気持ちがあることが、自己嫌悪感を感じさせることにつながっていると言える。

第二には、自愛心の中ではあまり重要な位置を占めるとは言えなかった「SL1満足感」であるが、この標準偏回帰係数が負の値になることであった。確かに今の自分がいやだと感じていることと、自己の現状をこれでよいと是認し満足を感じていることとは、反対の意味の気持ちであろう。

第三には、対他的な自己嫌悪感においてのみ、「SL3自己尊重」の標準偏回帰係数が負の値になったことである。ここでの対他的な自己嫌悪感二次因子パターンから見て、佐藤(1994)における大学生群の二次因子Ⅰとほぼ同じである。まだ自分に自信がなく、気後れして他者の存在をうまく自分の中で関係づけることができない、うまくかわることができずにいることから感じられる自己嫌悪感である。それゆえ、自分を重んじ、大切にしようとする気持ちになれないでいることと関連がみられるのだと考えられる。自己の価値を認められ、自己を尊重しようとする気持ちがもてるようになれば、それと相まって他者とのかわりに気後れすることもなくなり、それに関連する自己嫌悪感も少なくなっていくと考えられる。

以上のような結果が得られたが、傷つくことから自己を守ろうとすることと自己嫌悪感との関連については、佐藤・落合(1995)が自己の否定的な側面から目をそらすことが自己嫌悪感と関連している

と指摘したことをさらに説明することになった。また、対他的な自己嫌悪感と自己を尊重しようとする事との負の関連については、佐藤(1996)が、大学生の自己嫌悪感、自分を尊重し、大事にしようとする感じとは逆方向にある感情だと指摘したことに一致している。これらのほかに、今回の研究成果として新たに指摘されるべきことは、自分に高い要求水準を課し、自己に対して理想主義的に完全さを求めるという意味での自己への愛が、大学生に自己嫌悪感を感じさせることの一因となっていたことである。詫摩(1978)が、自己嫌悪感が青年期に強くあらわれることの第一の理由としてあげた“青年がこのようにありたいと望んでいる水準が高い”ということが確認されたと言える。詫摩は続けて、“青年は自分に期待するところが大きいだけに、それが満たされないときの失望も大きい”と述べる。このように考えるなら、青年期に自己嫌悪感が感じられることはやむを得ないことと言えるであろう。なお、詫摩のほかに、“自分に対してつよい期待と要求をもっている人は、いったん自己嫌悪におちいると、極端なほど自分を否定するようになりがち(片口, 1969)”であることや、“「おれはやれば何だってできるし、誰にも負けないものを持っている」という気持ちが心の奥にあるために、彼は現実の自分が理想から離れていることで自分を罵倒し、「こんな自分はどうにもならない」と嘆いている(町沢, 1995)”事例が言及されている。さらに三木(1971)は、23才の自己嫌悪に悩む女性の事例研究の中で、“自己嫌悪が生じたのも、結局は現実の自分をみつめることをせず、理想的な自分の姿に目を向けていたからである”と指摘し、“自分のnegativeな側面を彼女は拒否していたのであるが、内観後はそれを受容できるだけの自分になった”と述べ、この事例の女性の“現実の自己・真実の自己(real self)をみつめ、現実立脚して理想の自己(ideal self)に向かって着実に進んでいこうとしている”ことを評価している。そして、5ヶ月後の追跡調査は、この女性が順調な生活を送っていることを報告している。

これらのことから、青年期にある人が、自己嫌悪感に悩まされて苦しいという場合には、以下のことを自分に説いてみてはどうだろうか。現実としては存在しない理想の自己を自己愛的に維持し守ろうとするのではなく、他者とかかわりあう世界に身をおいて、その中で現実の自己をありのままにみつめる、このことが解決につながることもある、と。

引用文献

- ベッテルハイム, B. 1978 (波多野完治・乾侑美子訳) 昔話の魔力 評論社
 遠藤辰雄・井上詳治・蘭千壽(編) 1992 セルフエスティームの心理学-自己価値の探究- ナカニシヤ出版
 藤澤賢一郎 1995 自己愛はいかにして可能か 東京経済大学人文自然科学論集, 99, 108-83.
 福島修美 1971 感情の発達 佐藤正(編著) 青年心理学 多摩書房 Pp. 105-128.
 伊藤美奈子 1997 個人志向性・社会志向性から見た人格形成に関する一研究 北大路書房
 片口安史 1969 性格のはなし 誠信書房
 町沢静夫 1995 欲望にとらわれる心理 大和出版
 三木善彦 1971 内観法の研究-(3) 自己嫌悪の女性の事例- 社会学部論叢(仏教大), 5, 41-71.
 西平直喜 1973 青年心理学 共立出版
 西平直喜 1981 子どもが世界に出会う日 有斐閣選書
 作田啓一 1988 ドストエフスキーの世界 筑摩書房
 佐藤有耕 1994 青年期における自己嫌悪感の発達的变化 教育心理学研究, 42, 253-260.
 佐藤有耕・落合良行 1995 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴 筑波大学心理学研究, 17, 61-66.
 佐藤有耕 1996 自尊心との関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴 神戸大学発達科学部研究紀要, 4, 1-12.
 佐藤有耕 1997 2次元でとらえた青年期の自己嫌悪感の発達過程 青年心理学研究, 9, 1-18.
 詫摩武俊 1978 青年の心理 培風館
 津波古充文 1995 自愛心と利他心-J. バルフォアの道徳論- 大阪産業大学論集社会科学編, 100, 45-50.

自愛心の関連からみた大学生の自己嫌悪感の特徴

堤雅雄 1982 青年期における自己対象化と存在論的危機 島根大学教育学部紀要(人文社会科学), 15, 43-53.
上地雄一郎・宮下一博 1992 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観[1] 岡山県立大学
紀要, 37, 107-117.

付記

自愛心に関する資料収集から項目の作成・選定までは、授業として行った実習の中での共同研究であるが、了承を得たのでここに著者の名前で発表する（講義名：発達研究法Ⅱ[平成9年度]，共同研究者：神戸大学発達科学部発達基礎論コース3回生(当時)4名；前川雅子，清井優子，藤原一基，三木秀果）。

